北海道医師会役員

退任のご挨拶

理事退任に当たって

前理事
千　石　一　雄

１年間と短い期間でしたが、昨年度、旭川医科大学医師会の代表として北海道医師会の理事を拝命いたしました。時間に余裕がなく、なかなか理事会に出席できなかったのですが今年の１月頃だったでしょうか、初めて理事会に出席いたしました。自分の座る場所もわからず、オロオロとしておりましたがなんとか着席し、お隣の先生にご挨拶申し上げ、理事会が開催となりました。以前より常任理事会や理事会の議事録が回ってきており目を通しておりましたが、次々と執行部の方々より多岐にわたる分野の現状報告や今後の動向などが説明され、大変なところに来てしまったという思いが第一印象でした。

その中で記憶に残っているのが、新しく建てられた道議会議員庁舎の喫煙場所設置の件で、多くの署名を提出したにもかかわらず、未だ結論は得られていないという内容だったと思います。医療関係者ばかりではなく、多くの道民の常識とミニ永田町の常識はこれほどまでに違うのかと変に納得したことを記憶しています。３月以降は新型コロナ感染が議題の多くを占めるようになり、私が関連する周産期領域でも各地区で医師会、産婦人科医会、医育機関が妊婦、新生児の新型コロナ感染の予防、検査体制、陽性者の医療体制確保に関し話し合いが持たれたと聞いております。幸い現時点では全国で１例帝王切開が行われた患者が発生しましたが、感染者は非常に少なく、道内でも新型コロナ感染で問題となった妊婦はおりません。しかし、最近の第２波ともいうべき感染の広がり状況を見ていますと周産期領域の新型コロナ感染に対して提供すべき医療体制の再確認が北海道全域で必要になるものとも感じております。

日本医師会の新会長も北海道出身の中川俊男氏に決定し、北海道医師会としても新会長の出身母体として支える立場となり、責任は増すものと思われます。中川氏は旭川市出身とのことで、我々旭川に住んでいるものにとりましてもなんとなく身近に感じられ、新会長の手腕に大きな期待をしております。

大学を定年し、半分隠居、半分働く生活を楽しみにしていましたが、定年退職と、新型コロナ感染が重なり自粛の毎日を送らざるを得ない状況が続きました。withコロナ、afterコロナの新しい生活をどのようにすべきか現在模索中です。

また、誰にも予想できなかった感染症の蔓延により、現在の医療効率ばかりを追求した医療政策の脆弱性が露見された形となりました。地域医療構想、働き方改革、医師確保計画の三位一体改革の根本的な見直しも必要になるのではないでしょうか。有事の際にも持続可能な医療制度・体制の構築に向け、医師会のはたす役割は更に重要性が増すものと思われます。北海道医師会のご活躍を祈念いたしております。